

## 土地に学び、人との対話を重ね、分断されたつながりを取り戻したい

村上 悟

これまで、丹生ダムに関する実態を知りたいと思って、何人かの関係者の方にお話を聞かせていただきました。初対面の私に、限られた時間の中でお聞かせいただけたことは、それぞれの方が経験されたことのほんの一部ではありましたが、私にとっては目を開かせていただくことがたくさんありました。

中でも印象的だったのは、集団離村やダムに伴う移転で村を出られた方が、頻繁に自分の村を訪ねられているということです。村の水をポリタンクに汲みに来られる方も多いようです。「息子夫婦のところにも居場所がない」と故郷を訪ねられる方も多いとお聞きしました。

その人々は、自分自身であり続けるために故郷の村を訪れるのだと、私は思います。人は、自分を育んだ村、土地、水、空気、風景と一体になって存在するものです。だから、それらを失うことは、自分を存在させる基盤を失うことに等しいと思います。

ところが、行政が進めてきたこれまでの公共事業は、人、村、川、山と、本来繋がりがあっているものを切り離してきました。ダム建設計画が持ち上がってから現在にいたるまで、ダム建設予定地の人々が味わって来られた苦しみは、村を分断し、人格を分断してしまう巨大な力に対する、必死の抵抗だったのだと思います。共に力をあわせて村を守ってきた村人同士の気持ちのすれ違い、ご先祖様への申し訳ない気持ち、やり場のない無念さ……。その心の痛みは、私の想像ではとても及ばないものなのだと思います。

このような悲しい歴史が刻まれたことの根本要因は、河川管理や社会基盤の整備が行政の一手にゆだねられ、流域住民が問題解決に関与する機会を逸してきたことにあると思います。上流域の林業不振から生じた過疎問題、山林の崩壊による保水能力の低下、急速な産業発展に伴う水需要の急増……。それらはすべて、流域全体が競争社会に巻き込まれた中で生じた問題であり、広く流域で受け止める問題です。それなのに、実際には上流域の一部の人々と河川行政の担当者だけが精神的な負担を負う形で問題の対処がされてきました。最初から、流域に住む人々（特に子どもや女性）に広く問題を問いかけ、悩みを共有し、問題解決の方策を立てて来たならば、一部の人たちにしわ寄せが行くような状況にはならなかったのではないのでしょうか。

私達は、相互理解をするために、言葉を持ち、通信手段を持っています。なのに、面倒なことは行政に押し付け自ら対話することを避けてきました。その結果、人々の暮らしは行政の縦割りで分断され、人と人とのつながりは薄れて地域社会が崩壊しています。

他人任せの公共事業を繰り返していけばいくほど、私達は土地とのかかわりや人間同士の関係を失い、自分という存在が空虚なものになっていきます。今一度、河川管理や社会基盤整備は行政がやるものだ、という思い込みを捨て、自らが主体となって社会基盤作りを進める覚悟を持つことから、自然の再生と地域社会の再生、そして自分自身の人生の充実が始まると思います。

先人達は、100年先を見越しさまざまな困難を乗り越えて村をついできました。私もまた先人に習い、生まれ来る子ども達を育むことのできる健全な自然と社会を受け継いでいきたいと思っています。そのために、歴史に学び、人と対話し、現地を歩いて土地と対話し、自分の感性で現実を捉えたい。そして、子ども達に受け継ぐべき地域づくりのために、自分ができることを見つけ出したい。その取り組みを、一人でも多くの方と力をあわせてやっていきたい。それが今の私の思いです。